

平田公園と平田靱負（ひらたゆきえ）翁銅像

合併以前の旧平田町時代、平田靱負翁銅像建設委員会の募金活動により製作が開始され、平成7年11月3日、当時の輪中公園（現平田公園）において、除幕式が盛大に挙行されました。

それ以後、平田靱負翁の家臣であった黒田唯右衛門様の命日に当たる7月7日には、毎年、旧平田町主催による「平田靱負翁に感謝を捧げる会」が銅像前で行われてきました。平成17年、海津町・平田町・南濃町が合併し、「海津市」が誕生すると、「輪中公園」は、「平田公園」と改称され「平田靱負翁に感謝を捧げる会」は、宝暦治水史蹟保存会が継承し、現在は毎年7月の第1土曜日に、平田靱負翁顕彰事業「感謝の集い」として、宝暦治水に対する市民の感謝の気持ちを伝える式典を挙行しております。平田公園は、海津市における宝暦治水顕彰の中心施設として、市民に親しまれています。



平田靱負翁銅像
(平田公園)

銅像のプロフィール

原 図 平田靱負正輔家第九代当主平田好二氏所有の伝「平田靱負肖像画」
(当時は、第八代当主平田正風氏)

作 者 熊谷友児

寸 法 銅像 3メートル 台座 7メートル

総工費 約1,363万円

宝暦治水とは

宝暦3年12月25日（1754年1月18日）、江戸幕府が薩摩藩（現鹿児島県）に命じたお手伝い普請による木曾三川の治水工事のこと。薩摩藩は宝暦4年から翌年にかけて、総奉行平田靱負（薩摩藩家老）以下多数の藩士を現地に派遣し、工事の監督、資材集めにあたりました。

工事はお救い普請とも呼ばれ、地元民最優先で作業することが義務付けされ、農繁期には作業しないなど、様々な制約がある中で行われました。一度工事したところが再び洪水で決壊したり、途中で工事が追加されたり、工事法も決まらないままで作業が開始されたりと、薩摩藩にとっては非常につらい工事で、多くの犠牲者を出しましたが、わずか1年余りで見事完成させました。

この時行われたのは、三川分流の基礎となる大切な工事で、後世高く評価されています。

この工事のために薩摩藩が借入金や増税で集めた総額は、37万両に上るといわれています。平田靱負は、藩主に報告するため江戸に出発しようとしていた直前の宝暦5年5月25日に、大牧の役館でなくなりました。享年52歳。遺骸は、即日京都・宇治の大黒寺に送られ、薩摩藩によって丁重に埋葬されました。平田家歴代の墓があった鹿児島島の妙谷寺には、遺髪が送られました。

平田靱負翁を祀る治水神社（海津市）では、春の大祭の時、平田靱負翁と同じ数え年52歳の心男が、工事現場の一つである千本松原を舟みこしを率いて練り歩き、宝暦治水の偉業を偲びます。

平田靱負翁の辞世と伝えられている和歌

住みなれし 里も今更 名残にて 立ちぞわづらふ 美濃の大牧

(この間住み慣れた大牧の里が、今となっては名残惜しく思われて、立ち去りがたいが、心を残して出発します)